

結束

小島奈津子

今春、いよいよ20期目を迎える法政大学自主マスコミ講座。講座の代表的なOGであるフリーアナウンサーの小島奈津子に話を聞いた。

OGインタビュー



「あまり真面目な講座生じゃなかったですね。すごくアナウンサーになりました。いつていうのはあつたんですけど、もともと熱意のある人がたくさんいて」

小島奈津子は学生時代をこう振り返る。人に何かを伝えたいとの思いからアナウンサーを志し、法政大学自主マスコミ講座（以下「自主マス」）に飛び込んだ。そこでは厳しい現実を突き、それでも彼女はアナウンサーになるために多くのことを学んでいった。

みんなと協力して、熱いものを1つにしていく

「自主マスを通して、アナウンサーになるため、社会人になるために得たものは？」

自主マスは志が具体的です

よね。アナウンサーになりたとか、新聞記者になりたいとか。そういう輪の中に私はそれまで入ったことがなかったんで。同じことを一緒にやると、1つになるっていうことが、これだけ力強いものになるんだって感じたのもこの頃からでした。人の頑張りを、私も頑張らなきゃと思つたのも人生の中で初めてだったかもしれない

実際に社会に出ると、チームで仕事をしていくことになる。そのような場で自主マスでの経験が役に立つ。

「仲間が何をやってたかっていうことも実は自主マスでも大事なことで、たかな。だから人と繋がってない仕事はうまくいかない。マスコミは1人の個性だとしてよく言われるけど、たくさん人の個性が1つになって、大きい1つの物が生み出される場所。協調性がないと実はずりだと思つたところだ。個人的過ぎていけないところだなと私は思っています」

「そういうことを自主マスで学んだ？」

「そうかもしれない。協力し合ったりとか、情報を交換し合ったり。何か熱いもの？ みんなやっぱり知的好奇心は旺盛だと思つてますよ。個人的な人も多かったし。でもそれも何か、みんなと協力して、熱いものを1つにしていくっていうことを感じ取っていったら良いのかな」

自主マスでの日々を回想する中で、彼女はチームで協力すること、個性を1つにすることの必要性を強調した。それが今でも彼女の中で生き続けるからこそ、その言葉は確かな説得力を帯びていた。

自分の好きなことを突き詰める力を、2年半で養うことが重要

自主マスには伝統がある。強い熱意、高い志によって結成できる、素晴らしい

仲間が集うという伝統。現実を前にして不安を感じていた小島奈津子が、それでも「夢みたいなこと」を実現させた時のように。

「マスコミに入って重要だと思つたことは「知りたい」という知的好奇心や一歩踏み込む力。それを学生のうちから身に付けていけば、マスコミへの近道になるかもしれない。だから漠然と（就職活動までの）2年半を過ごすよりも、自分の好きなことを突き詰めていく力を、2年半で養っていくことが重要だということをお願いしたいんです。それが（マスコミ就職への）近道になると思えます」

好奇心のままに飛び込んだ時、伝統の力が目標を実現させるためのヒントをくれるだろう。

自主マスは20年目を迎える。

